発表タイトル	『香名引歌之書』　―和歌が語る香り―
発表者所属名	日本文学研究専攻
発表者氏名	武居雅子

国文学研究資料館所蔵の御家流香道伝書群の一冊に、『香名引歌之書』がある。伝書群は各冊に「岩田漱芳先生の本を以て」書写したという宮崎詮恭の奥書を持ち、寛保・延享・宝暦にわたり書写されたもので、『香名引歌之書』には寛保二年二月二十日書写の奥書がある。

岩田漱芳先生とは『雅遊漫録』『青湾茶話』の著者・大枝流芳のことで、彼は多くの香道書も上梓している。『香名引歌之書』の元文三年の大枝流芳の奥書には、彼の師「大口（含翠）先生より伝ふる所なり」と言い、「中古の人集し書なるべし」「此書に附る詩歌、牽合附会多し」とした上で、「中世より伝る書なればしばらく写止て書中の大意をここに記し侍る」とある。

本書は「六十一種之名香」「追加」「右之外名香」として計 132 種の香名を挙げ、そのうち 106 種に対し、合わせて 78 首の和歌、25 首の漢詩を記している。これらは香名の由来として示されたものと考えられ、本発表では和歌を中心に考察を行う。それらの和歌は『新古今和歌集』に拠るものが 25 首と多く、他の勅撰集からも採用され、『拾遺愚草』などの私家集や『伊勢物語』『源氏物語』の歌もみられる。ただし今のところ、6 首は典拠不明である。

香りのイメージを語る和歌であるため「匂ふ」や「香る」などの語を含むものが 78 首のほぼ半数あるが、それらは「六十一種之名香」「追加」の 44 首中に 31 首と集中しており、「右之外名香」では 34 首中 6 首に過ぎない。このことは、「右之外名香」には漢詩が 1 首も挙がっていないことなどと併せ、少なくとも「右之外名香」の部分は他の編者の手になることを推測させる。

いずれにしても、茶道具とは異なり実体のない香りのイメージを表すために付されたこれらの和歌は、名香の味わいや表情、質感を伝えるために機能し、一木賞翫から証歌を持つ組香の誕生へと至る、香道における文学受容のひとつの例と考えられる。